

本陣で遊ぶ子犬たち

くしずこしだかしょうじ 「狗子図腰高障子」(草津宿本陣蔵)



草津宿本陣の座敷部から続く畳廊下から庭を望む正面、上段相の間には「腰高障子」が設えられていました。4枚の障子の下部、座るとちょうど目の高さぐらいの位置に、「狗子図」が描かれています。「狗子」とは子犬のこと。背景などは描かず余白を残した構図で、ころころとかわいい子犬が遊んでいます。障子を開けると主庭が望め、それを背に遊ぶ様子を描いたものでしょうか。主客が利用する上段の間の横で、見る人の心を和ませていたのかもしれませんが。

このかわいい子犬たちの絵は、江戸時代中期ごろから京都の画家が好んで描いた画題でした。描き始めたのは「写生画」で名をはせた円山応挙(まるやまおうきよ)(1733-1795)といわれています。応挙は型にとらわれずに子犬を「かわいく」描きました。初めて描いたのは応挙が30代の頃のこと。写生を基本とした応挙が長きにわたって描き続けたお気に入りの画題だったようです。応挙は犬の持つ「リアルな可愛さ」を切り取るという新しい描き方にたどり着き、その瞬間を捉

えた「応挙の子犬」の画風は「かわいい絵」が一世を風靡するきっかけをつくりました。実物よりもさらに、ころころ、もふもふした応挙スタイルの犬の絵は江戸時代の人気キャラクターとして大ヒットを続けます。

「応挙の子犬」の流行の陰には大勢の門人がいました。画家としての個性の表現より、人々の暮らしに資するために描くということに重きを置いていた応挙の画風は、暮らしの中に美を求める人々の広がりとともに、弟子たちによって広がっていったのです。

また、草津宿本陣の向上段の間に襖書が残る京都の儒学者、皆川淇園(みながわきえん)(1734-1807)も応挙に画を学んだとされている一人です。画人仲間の中でも二人は特に親密であったようで、二人に関わる設えが本陣上段棟に残っているのも興味深いところです。

「狗子図腰高障子」の子犬たちは、草津宿街道交流館の常設展示でいつもかわいく皆さんを迎えています。

(令和8年3月・草津宿街道交流館 吉崎 早苗)